講演要旨

碁盤の上のからくり人形

武　井　協　三

江戸時代を代表する芸能は、歌舞伎と人形浄瑠璃です。人形浄瑠璃は義太夫節という音曲にのって語られる物語ですが、これには人形芝居が付随して上演されます。耳に訴えるのは重厚な太夫の語りと三味線の演奏、目に訴えるのは繊細な人形の演技で、太夫、三味線、人形の三者が創り出すのが、今日では「文楽」とも呼ばれている人形浄瑠璃です。

文楽を初めて見た人のだれもが違和感を感じるのが、「出遣い」という人形の遣い方です。美しい若い娘の人形の背後に、頭のはげ上がった人形遣いが、ニュッとばかりに顔を出して、人形を遣っているのです。

多くの国に人形芝居はありますが、人形の遣い手は、黒い頭巾や黒装束を身につけ、背景の黒いカーテンに溶け込んで、自分の姿は見えないようにしています。ところが文楽では人形遣いは隠れようとはせず、劇の世界にとっては邪魔になるはずの、遣い手の人間の顔を、どうどうとさらしているのです。

これはいったいなぜなのでしょうか。

国文学研究資料館に「碁盤人形の図」という、一幅の掛け軸があります。碁盤の上の小さな人形を、後ろから人形遣いが操作している絵です。この絵を見ながら、なぜ文楽では人形遣いが顔を隠さないのかという問題を、解いていきたいと思います。

武井協三（たけい きょうぞう）　　国文学研究資料館 名誉教授

【専　　門】日本近世演劇（歌舞伎・人形浄瑠璃）

【主な業績】

・『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』八木書店、2000 年

・『江戸歌舞伎と女たち』角川書店、2003 年

・江戸人物読本『近松門左衛門』ぺりかん社、1991 年

【最近の研究】

歌舞伎が歌舞伎であるための必要条件、歌舞伎の本質とはなにかといったことについて考えている。また、藩政史料を博捜し、歌舞伎や人形浄瑠璃の上演記録を見つけ出し、「座敷芝居」という江戸時代の演劇ジャンルについて考察している。